

フーピン  
富萍——上海に生きる

sample

sample

飯塚  
容  
訊

## 第一章 おばあちゃん

その日の午後、富萍<sup>フーピン</sup>はおばあちゃんが住み込みで働いている家に着いた。路地では数人の少女がゴム跳び<sup>ゴムヒ</sup>をしていて、コンクリートの地面を踏む靴音がこだまとなり、両側の塀に響いていた。午後四時ごろの日差しが、黄色く輝いている。少女の衣服が日差しを浴びて、とても美しい。富萍はおばあちゃんの手紙の指示どおり、路地の奥にある門の前に立った。門は開いている。富萍の体が光線をさえぎった。門の向こうの通路には、数人の女がすわっていた。顔ははっきり見えないが、背後からの光で輪郭だけはわかる。一人が立ち上がって、富萍に話しかけた。来たのね。富萍は、おばあちゃんと叫んだ。

おばあちゃんは、李<sup>リー</sup>天<sup>ティ</sup>華<sup>エンホア</sup>のおばあちゃんだが、血のつながりはない。李天華は養子縁組でおばあちゃんの孫になった。富萍に縁談を持ってきた仲人は、二つの点を強調した。李天華が中学出たということ、そしておばあちゃんが上海で家政婦をしていることである。李天華は兄弟が多くて長男だから、生活が苦しいのは事実だが、まったく希望がないわけではない。おばあちゃんは早くに

夫を亡くし、息子も亡くした。娘は他家に嫁ぐから、この孫だけが将来の頼りだ。中学の学費も出してやった。おばあちゃんは十六歳のときに上海に出て住み込み家政婦となり、それからもう三十年がたつ。れつきとした上海人、地位のあるおばあちゃんと言つていいだろう。

富萍は幼くして両親を失い、叔父と叔母に育てられた。自分の結婚のことは大問題だったが、口に出せず、気をもむばかりだった。縁談に対して、富萍はただうつむいて、いいとも悪いとも言わない。相手が訪ねてきても、絶対に姿を見せず、友だちの家に一日身を寄せ、来客が帰るまで戻らなかった。相手の家に連れて行くこうとすると、なおさら強く抵抗した。叔母は一人で行くしかなかった。もし破談になれば、他人は叔父と叔母が姪の一生をないがしろにしていると言うだろう。帰宅後、叔母は富萍に言い聞かせた。おばあちゃんは心やさしい人だ、弟や妹たちも聞き分けがいい、上の妹はすでに嫁ぎ先が決まっている、来年は家を改築するはずだ、などなど。それでも、富萍はいいとも悪いとも言わない。だが、李天華が来ると聞いても、今度は逃げ隠れしなかった。李天華が来た日は、食事とお茶が用意された。富萍はうつむいたまま上目づかいに、きちんと揃った黒い布靴を見た。靴は小さめで細く、先が少しとがっている。靴下は白で、甲が高い。農作業に慣れている足なら、もつと平べったく、泥水の中でも揺るがないはずだ。富萍は見取った。この人は肉体労働に向いていない。その後、仲人が結納の金品を届けてきた。一般的な毛糸、衣料、刺繍糸のほかに、旅費があった。一度上海に遊びに来るようにという、おばあちゃんの計らいである。かくして富萍は、おばあちゃんのもとを訪ねることになった。

おばあちゃんと言っても、富萍の叔母よりも少し若いらしい。髪の毛は黒く、前から見ると丸髻を結っているようだが、実は短い髪を耳の後ろに流していた。着ている服は藍色木綿の長衣で、ボタンつき、立ち襟だった。顔の色は都会の人のように白くもなく、田舎の人のように黒くもなく、黄色っぽい。顔はふっくらして、肌には張りがあったが、しなやかさに欠けていた。ただし、それは老化を意味するわけではない。健康的なのだ。手も同様だった。骨太で、きめが粗い。話す言葉はすでに変化して、完全な田舎の方言ではなかったが、上海語とも違う。上海語まじりの方言なのだった。歩くときは背筋を伸ばし、椅子にすわって食事や仕事をするときも正しい姿勢を保っていた。しかし、腰を曲げ足を広げてしゃがむと、とたんに田舎の女に戻る。おばあちゃんの顔も同様だった。目鼻立ちがはつきりせず、少し太っているのだが、田舎の女には見えない。しかし、話をするときには、わずかに下唇が突き出し上唇がまくれ、歯がのぞく。いつの間にか、気性の激しい田舎の女が変わってしまうのだ。若いころ目尻に受けた傷の痕は消えていたが、目元が少し窪んでいる。したがって、見る角度によっては横目づかいになり、勝気そうな色つぼさが生じた。とにかく、おばあちゃんは上海で三十年を過ごしてきたのに、都会の女になりきれず、かと言って田舎の女にも見えない。まさに半分半分、特別な人種になっていた。道を歩けば、ひと目で家政婦とわかるのだ。

故郷の揚州ユンチウでは、女が家政婦として出稼ぎに行く伝統があった。長期の場合もあれば、短期の場合もある。おばあちゃんのように、すでに上海で戸籍を得て正式の住民となっている人も、近隣の

村に何人かいた。多くは若い未亡人か、夫に甲斐性がなく、しかも子供のいない女だった。おばあちゃんも、その一例である。身寄りが無いから、自分に頼るしかない。出稼ぎ期間が長くなると、帰ってくるのが難しくなる。帰ってきてても、またすぐに出て行く。もはや土地の水が合わなくなり、おなかを壊したり、湿疹が出たりするので、すぐに戻ってしまうのだ。ついでに一人か二人、女の人を連れて行き、上海で雇い主を見つけてやる。ときには上海から手紙をよこして、誰かを家政婦として呼び寄せた。しだいに、故郷の人が上海に多くなった。しかも、ほとんどが近所で暮らしている。雇い主どうしが親戚や友人なので、しばしば顔を合わせる事ができた。それならば、異郷での生活も適応しやすい。

おばあちゃんは上海での三十年を主として西地区の繁華街、ホアイハイ淮海路で過ごしてきた。だから、繁華街の住民と同様、周辺地域を荒涼とした田舎だと見なしている。しかし、周辺地域の閩北や普陀には、おばあちゃんの同郷人が多く集まっていた。そのほとんどは、過去の戦争と飢饉のとき、船を操って蘇州河を経て上海に到達した人たちだ。彼らは空き地を見つけて、船室のようなアンペラ小屋を建てて住みついた。そのあと、工場で仕事を得たのだ。上海の工場労働者の少なくとも半数が、彼らのような人たちだった。だが、おばあちゃんは彼らと付き合いがない。都会人と同様の偏見から、淮海路こそが上海の名にふさわしいと思っっているのだ。

おばあちゃんは上海西地区で数十年、家政婦をしてきたので、いろいろな家庭を見ていた。とても経験豊富だと言える。越劇ユエチユイ（浙江省の地方劇）の女優の家で働いたこともあった。女優は出演料で実入り

がいい。夫は美容整形の開業医だった。夫婦には子供がなく、外国人居住民用のアパートに住んでいた。アパートの門番はインド人で、エレベーター係も外国語を話す。それで、おばあちゃんも、いくつか外国語を覚えた。「おはよう」「ありがとう」「行く」「来る」など。おばあちゃんは炊事も洗濯もしなくてよかった。毎日の仕事は、彫刻や螺鈿の細工が施されたマホガニーの家具の埃を刷毛で掃除することだった。おばあちゃんは間もなく、この家を出た。あまりにも暇で、人の気配が乏しかったから。

次に雇われたのは、淮海路を少し東に行ったところの長い横町にある家だった。暮らし向きはパツとしない。子供が多く、夫が一人で生活費を稼いでいた。職場は外灘の外国商社である。おばあちゃんは夫人と一緒に家事をこなし、子供の世話をした。夫人のほうが顔色が悪く、みすぼらしい身なりで、よほど使用人らしく見える。毎日の薪や米にも困っていたから、おばあちゃんの給料も滞りがちだった。間もなく、夫は肺病をわずらい、家で療養するようになった。おばあちゃんは夫人が泣いて引き留めるのも聞かず、きつぱりと職を辞した。最後の一か月の給料を要求しなかったばかりか、自分で金を出して子供たちに下着を買ってやった。救いようのない毎日に、嫌気がさしていたのだ。

中流家庭に雇われたこともあった。夫婦共働きで、子供は四人。とても夫婦仲がよく、夫の妻に対する愛情は度を超していた。妻のために、半ポンドの牛乳を届けさせ、毎日沸かして飲ませた。妻が臭いを嫌って飲まないと、レンジで口元まで運んでやる。ここまで仲がいいと、子供には手

が回らない。だから四人の子供はすぐ、おばあちゃんになつた。おばあちゃんも四人の子供が気に入った。しかし、おばあちゃんはやはり、きつぱりと職を辞した。夫の愛情表現が気持ち悪くて、耐えられなかったのだ。おばあちゃんは早くに夫を亡くし、ずっと後家を通してきたから、見ていられなかった。ただ、子供たちのことは心残りだった。その後、おばあちゃんが別の家に移つても、子供たちは会いに来た。おばあちゃんは新しい家の子供を紹介して、遊び友だちにしてやつた。

新しい雇い主の家は、古い雇い主の家と通りを一つ隔てただけだったが、二段階ほど高級な横町で、アパートが並んでいた。新しい雇い主は医者である。すでに一九四九年以降のことで、開業医をやめ、市立病院の院長になつていた。出退勤は自動車の送り迎えがある。いかめしい男で、おばあちゃんと話したことも、食事を一緒にしたこともなかった。だが、おばあちゃんはこういう男を重んじた。貫録があるからだ。妻もよい人だった。穏やかで度量が広く、子供や使用人の前で夫といちやつくこともしない。ただ、三人の子供はかなり軽薄だった。上の子は女で、中学に入ったばかり。だが、すでに流行を追つて髪にパーマをかけ、胸にブラジャーをつけ、母親の絹のストッキングを履いている。いつも、おばあちゃんが洗濯で服をダメにしたと文句を言い、お嬢様風を吹かせていた。下の二人は男の子で、少ししだが、やはり傲慢だった。昔の雇い主の子供が遊びに来ても、相手にしない。会話のすきを与えず、一人でピアノを弾いている。昔の雇い主の子供が部屋の隅で小さくなつてのを見て、おばあちゃんは心が痛んだ。だが、やはり子供は子供で、気取つてばかりはいられない。そのうち、一緒に遊ぶようになった。ある日、主人が早めに仕事を終



えて帰宅すると、見知らぬ子供が家の中で遊んでいる。その場では何も言わなかったが、あとで妻を通じて、おばあちゃんに伝言した。今後、あの子供たちを出入りさせないように。おばあちゃんは、これが不満だった。数日後、口実を見つけて職を辞した。おばあちゃんも、権勢を重視しないわけではない。しかし、自尊心が強いので、あまりに傲慢な人には耐えられないのだ。

おばあちゃんは、すでに上海で怖いものなしだった。家政婦の中で、奉公先から選ばれるのではなく、奉公先を選べるのは、自分だけだと信じていた。しかも、心の中で決めていた。西地区の淮海路の上海人の家でしか働かない。山東弁を話す、地方出身の幹部の家からの誘いは断った。

ある人に、虹口の軍の宿舎を紹介されたことがある。司令官の家の子守りで、給料は高かった。しかし、一度行ってみて、断ることにした。その司令官の家は一戸建てだったが、室内には大した家具がない。ワックスをかけた床、壁ぎわにソファークッション、まるで役所の会議室のようだ。台所はとても広いのにほとんど使わず、お湯を沸かすことすらない。数名の兵士が、外のお湯屋さんから運んでくる。食事のときは食堂へ行くが、一か所ではなく、司令官が行くところと同じく軍人である妻が行くところは別だった。子供が行くところも、また別である。生活の匂いがしないので、おばあちゃんは我慢がならなかった。兵營のような環境も好きになれない。そこで宿舎から出て、広大な空の下を歩いた。道もまた広々としている。見渡すかぎり、人っ子一人いない。人家も見えず、とても荒涼としていた。人の住むところじゃないわ！ おばあちゃんは心の中で悪口を言った。田舎だったら池があり、池にはアヒルやガチョウがいた。畑には耕作する人と牛の姿があった。

歩いているうちに村があり、村には炊煙が立ち昇っていた。時を告げるニワトリ、北方から渡ってきたツバメがいる。遠くに赤レンガの家が見えた。赤レンガは窯で一度焼いただけのもので、きめが細かくて丈夫な灰色レンガに及ばない。しかし、それがハコヤナギの木の間に見えると、格別なまめかしい。おばあちゃんは揚州の田舎の情景を思い出した。何と彩り豊かだったことか！一台の軍用トラックが通り過ぎ、埃が舞い上がった。おばあちゃんの体や顔も、埃にまみれてしまった。

スーチエンベルハイニル  
四川北路や海寧路のあたりへ行けば、おばあちゃんの郷愁もいくらか解消された。道幅がさらに狭くなり、店舗、通行人、電車、自動車がひしめいている。横町の入口から中をのぞくと、干しである洗濯物、遊んでいる子供が見えた。台所の煙の臭いも漂ってくる。それは、おばあちゃんが比較的よく知っている生活風景だった。しかし、虹口のアパートとなると、みな同じ作りで大きすぎる。赤レンガの壁、黒い鉄柵で囲まれたバルコニーがあるので、なおさら大きく物々しく見えた。横町も広々として、雄大だった。上の階が道にせり出している建物は、圧迫感を与える。人間は？ 雑駁で、顔つきも様々だ。総じて不細工で、たまに美男美女がいても埋もれがちである。おばあちゃんには耐えがたい。幅の広い蘇州河にかかる海寧路の橋の上からは、遠くを往来する船が見えた。この河の臭気、そして湿った風も苦手だった。

淮海路に戻ってくると、ようやく安心する。新型アパートは薄っぺらな感じで、横町の奥まで見通せる。大通りは曲がりくねっていて、道幅がちょうどよい。店舗が隙間なく並んでいた。ビルもあるが、虹口の郵便局のようないかめしさはない。玄関とロビーが同じ幅なので、外からエレベ-

ターが動いているのが見えた。エレベーターの横の大理石の階段は、踊り場に色ガラスの窓があり、そこから光が差し込んでいた。玄関のエレベーター係が門番と雑談する声が響いていたが、近づくとも聞き取れるのはいくつかの単語だけだった。通りは賑やかだけれども、騒がしくはない。行き交う人は、ほとんど地元の人ばかりだ。家の作りがこじんまりしているのも、互いに血が通い、生活感がある。ここの住人は、みんな上品だった。虹口の人たちのような荒つばさが無い。服装もしゃれている。ひたすら流行を追うわけではなく、世間の流行を見極め、冷静さを失わない。多少、保守的でさえあった。

おばあちゃんは歩いてるうちに、完全に郷愁が癒された。先ほど述べたように、おばあちゃんはこの都市の市民の気質に染まり、先入観を抱いている。おばあちゃんがこの都市の市民でないと言うわけにはいかない。若者たちよりも、ずっとよくこの都市のことを知っていた。

おばあちゃんが話す奇談の数々は、夢にも思いつかないようなものだった。この界限かゝりに関する話だけでも、聞こうと思えば長い時間がかかる。たとえば、子供を誘拐する人の話。その人に頭を叩かれると、子供は方向感覚を失って一本の道しか見えなくなる。その人のあとについて、歩いて歩いて、最後は行方不明になった。夜中に聞こえる幽霊の声の話は実話だった。ある横町の老婦人は毎夜、幽霊の声をほぼ半年も聞き続けたあとで、亡くなった。ほかに、主人と家政婦が駆け落ちした話、妻の夫殺しの話などがあつた。

おばあちゃんはさらに、芝居の物語を話すことができた。『祥林嫂』シアンリンサオ（魯迅の小説「祝福」）、『王魁』ワンクワイと

「チキョウエイ 敦桂英」科挙の試験に合格した書生が、『リヤンシャンボ 梁山伯と祝英台』（男装して学問に、『ヤンサンチエ 楊三姐が釘板の上を転がる話』（姉をいじめ殺した義）（兄の罪を妹が暴く）など。ほとんどは、この町の市民の芝居、越劇の演目である。おばあちゃんは芝居のひとくさりを歌うこともできた。

信じてもらえないかもしれないが、おばあちゃんはアメリカのハリウッド映画さえ見たことがある。たとえば、チャップリンを知っていた。アメリカ風に「チャップリン」と発音する。しかし、アメリカ映画を特に気に入っているわけではない。なぜなら、アメリカ映画はほとんどがハッピーエンドだから。おばあちゃんはむしろ、悲劇を崇拜していた。悲惨なストーリーを語り出すと、すぐに涙を流した。

おばあちゃんが働いた家の子供はみな、お話を聞かされていた。おばあちゃんの語る話は子供の好みに合う。厳密に順序立てて話すわけではなかった。断片的で、話があちこち脱線する。しかし、強烈な雰囲気があるのだ。特に、恐怖に満ちた凄惨な話が得意だった。たとえば、『祥林嫂』では、敷居を寄進する場面（現世の罪をつぐなうために、土地廟に敷居を寄進する風習があった）に力を入れ、あの世で二人の夫が女房を二つに引き裂くというエピソードを強調した。『王魁と敦桂英』では、敦桂英が生き返る場面だ。『梁山伯と祝英台』は？「墓をあばく」ところだった。『楊三姐が釘板の上を転がる話』の一節は、いばん悲惨である。子供は聞いているうちに顔面蒼白となり、おばあちゃんに身を寄せる。恐ろしいのだが聞きたくもあり、しきりに要求する。もう一つ、もう一つ話して。

おばあちゃんは田舎の話をすることもあった。それらの話も恐ろしかったが、違う種類の恐ろし

さで、泥臭さを帯びている。おばあちゃんの田舎の泥臭さには、妖艶さも含まれていて、まったく素朴というわけではない。だから、聞いていると劇的で、色彩に富んでいる。

たとえば、花嫁を迎える話。色鮮やかな隊列の中に、花嫁の乗ったカゴがある。花嫁は、鳳凰の形をした冠と刺繍を施した肩掛けを身につけて、すわっていた。しかし、顔を上げ、振り返って歯をむき出すと、幽鬼の面貌が明らかにになる。こうして花嫁は、この農家に悪運をもたらした。

また、小鬼が寄生する話があった。ある夫婦は子供を生んでも夭折してしまい、せいぜい一歳までしか育たない。夫婦はつらくてならなかった。その後、神通力を持つ人に計略を授けられた。今度子供が生まれたら、ハサミで足の指を切れというのだ。そうすれば、あの世に連れて行かれることはない。そこで、夫婦は言われたとおりにした。ハサミを足の指に当てたとき、赤ん坊が急に目を見開いた。それは大人の目だった。ここが恐怖の絶頂、話の最高潮でもあった。

さらに、死にかけてた男が閻魔大王の遣わした獄卒を見た話がある。獄卒は手に持っている鎖で男を捕まえようとした。おばあちゃんは、獄卒が持つ鎖や武器の音をいかにも恐ろしげに、力強く描写する。まるで立ち回りの芝居のようで、実に見事だった。

これらの話は、おばあちゃんの身の上と関係があった。早くに夫を亡くし、二人の息子も相次いで世を去り、おばあちゃん是不運で、しかも強い女を自認していた。自分だけを頼りに、生きていくしかないのだ。長年の奉公で多少の蓄えはあったが、親戚縁者がこぞって借金に来るから、たまらない。借金と言っても、実際はたかりで、表現を穏当にしているだけだ。借りて行ったお金を返

す人はいなかった。どれだけの人間が、おばあちゃんを食い物にしていたことか！ 娘の縁談が決まると、娘婿の学費を工面させられた。甥が県の劇団で芝居を学ぶときは、最初の三年、衣食住の面倒を見た。妹の夫がコレラにかかったときも、おばあちゃんが医療費を払った。いまは孫が嫁をもらうという事で、またまたおばあちゃんの出費が求められている。

おばあちゃんが義理の孫の関係を結んだとき、上海の同郷人たちはみな反対した。いま人から頼られているおばあちゃんが、将来人に頼ることが可能だろうか？ たかられる相手が一人増えるだけだ。現在の奉公先の主人も、やめておけと言った。自分でお金を握っていたほうが確実だ。そしてわざわざ、おばあちゃんを銀行まで連れて行って通帳を作り、預金させた。田舎の人が無心に来たら、お金は通帳に入っていて、時期が来るまで下ろせないと言えればいい。それでも、おばあちゃんは義理の孫の関係を結んだ。

孫は実際のところ、おばあちゃんの義兄の孫だった。今年、娘が嫁ぐことになったので、家は義兄のものになる。だが孫がいれば、義兄の家になっても、それはおばあちゃんの家でもあった。年を取って動けなくなったら田舎へ帰り、正々堂々と住むことができる。その日のために、おばあちゃんは二重の姻戚関係を結んだ。娘の嫁ぎ先は、おばあちゃんの兄嫁の家なのだ。万一、孫に冷たくされても、兄嫁の家が受け入れてくれる。上海で三十年働いてきて、上海に戸籍があるとは言え、おばあちゃんは隠居するときは田舎に帰ろうと思っていた。お金を貸したり送ったりするの、そのときのためだ。みんなが恩義を感じ、大事にしてくれる。一時、娘婿が同級生と仲良く

なつたという噂が田舎から伝わってきた。おばあちゃんは人に代筆を頼んで、非難の手紙を出した。娘婿は「水を飲むときは、井戸を掘った人を忘れません」という返事をよこした。なかなか口がうまい。だが、この言葉はおばあちゃんの胸に届いた。確かに、おばあちゃんは井戸を掘った人に違いなかつた。

sample